東京白楊だより

第11号
63.10.20

白楊ケ丘同窓会東京支部

旧制　函館中学校
函館中部高等学校

『ご挨拶』

東京支部長　池田和行

東京支部会員の皆様のご推挙をいただいて第四代目の支部長に就任いたしましてから早三年、今秋には任期満了させていただくことと相成りました。その間東京支部満十周年の大会も、また東京白楊だより記念号もご関係各位のご尽力で実施されましたことは悦ばしいことでございます。

私どもの函館も内地と陸つづきとなり、当東京支部の数多くの皆様も青函博覧会等ご帰郷なさったことでしょう。函館も海底トンネル開通でいろ〳〵の意味で一変してゆくものと思われます。しかし白楊が丘に青春時代を過した絆は変ることはありません。一人でも多くの同窓生と手をとりあって力になり合える支部であらんことを会員皆様のご健勝とご活躍を祈念してご挨拶といたします。

『百年の歴史に向けて』

函館中部高等学校長　大沢昭夫

近代日本文化の香り高いロマンの街函館から、東京支部の皆さんへ着任のご挨拶を申しあげます。

さて、九十四年目を迎えた伝統ある中部高校は、今年に入ってその沿革史に二つの大きな項目を書き加えることになりました。

一つは、すでにご案内のことかと存じますが、三月の段階で校舎改築調査のための道費が予算化された旨の通知がありましたので、懸案の校舎改築促進期成会が去る九月三日に結成され、会長に改選前の笹島同窓会長さんが就任、早速陳情活動に入りました。十月に現地調査があり、順調にいけば明年度に設計、明後年度に着工、遅くも五年先の秋には完工の見通しであります。場所については、この際思い切って広いキャンパスに移転改築をという意見もありましたが、紆余曲折を経て移転には適地なく現地改築已む無しとの結論に達しました。道の調査結果によって正式に決定される運びです。

現在地は、基準面積の約六十五%という限定された状況ですので、二十一世紀に向けてどのような校舎の配置・構造とするか、これから各関係者のご意向をも勘案して、後世に残るような名設計をしていただけるよう取り運びたいと考えております。期成会にご意見をお寄せくださればと存じます。

もう一つは、去る九月十日の定時制創立六十五周年記念式典であります。定時制の、それも六十五という半端な数の年のと或いはお思いの向きもあろうかと存じますが、尋常中学校以来の古い歴史を有する全定併置校で、定時制のみの単独の創立記念式典挙行という例は全道的には恐らく初めてのことであり、全国的にみても極めて稀有のことでしょう。

三年前の九十周年記念の折、夜間部定時制課程卒業の方々の中から勃然と湧き上った声が結集されて実現に至ったのでありますが、実行委員会の掲げた募金目標額は優に二倍近くに達し、今なお後を絶たない程で、関係者の母校に寄せる熱い想いに胸を打たれております。苦学力行されただけあって、医師、弁護士、学者、芸術家、実業家、代議士等々多士済々な様はさすがに六十五年の重みを感じさせます。この気運が変容を余儀なくされつつある定時制教育の振興と、七年後に控えた創立百周年記念への一つの梯になることを念願しております。

最後に、教育活動を一層充実させ、生徒の自己実現に努め、校名の更なる発揚を図るために、伝統と創造の調和に立った特色ある学校づくりに努力して参ることを申し添え、本校の近況をご報告いたします。

東京支部のご発展を祈念申しあげます。

昭和62年度収支決算 (62. 4. 1から 63. 3. 31まで)

(63. 3. 31現在)

- 収入決算額　4,286,637円
- 支出決算額　3,306,369円
- 収支差引残高　980,268円

(内　訳)

- 定期預金　700,000円
- 普通預金　268,565円
- 現　金　11,703円

収入 科目	金額	支出 科目	金額
	円		円
会費収入	1,362,000	**運営費**	**587,142**
寄付金収入	40,000	消耗品費	4,825
利子収入	21,353	印刷費	32,790
大会会費収入	1,173,000	通信運搬費	11,520
小計	**2,596,353**	会合会議費	62,640
前年度繰越金	**830,284**	理事会費	113,894
積立金繰入	**860,000**	評議員会費	49,373
		本部等派遣費	138,800
		会費払込料負担費	32,200
		大会準備費	141,100
		事業費	**2,587,377**
		会報印刷費	750,000
		会報送料	586,100
		会報諸費	32,016
		大会費	1,007,020
		大会諸費	212,241
		雑費	**131,850**
		小計	**3,306,369**
		決算剰余金	**980,268**
合計	**4,286,637**	**合計**	**4,286,637**

○62年度決算の特色

- 年会費は、前年度に比べ92,000円の減少となりました。
- 本年度会報は、創刊10周年記念特集号（28ページ）を発行しましたため、印刷費、送料とも例年に比べ大幅に上回り、そのため、一部積立金を取崩しました。
- 本年度は名簿等頒布収入および雑収入はありませんでした。

昭和62年度決算剰余金 980,268円は、規約第19条にもとづき、次のとおり処分します。

積　立　金 400,000円
次年度への繰越金 580,268円

昭和63年度収支予算 (63. 4. 1から 64. 3. 31まで)

収入 科目	金額	支出 科目	金額
	円		円
会費収入	1,500,000	**運営費**	**880,000**
寄付金収入	1,000	消耗品費	20,000
利子収入	25,000	印刷費	50,000
大会会費収入	1,260,000	通信運搬費	20,000
雑収入	1,000	会合会議費	70,000
小計	**2,787,000**	理事会費	160,000
前年度繰越金	**544,000**	評議員会費	140,000
		本部等派遣費	240,000
		会費等払込負担費	40,000
		大会準備費	140,000
		事業費	**1,720,000**
		会報印刷費	200,000
		会報送料	220,000
		会報諸費	40,000
		大会費	1,060,000
		大会諸費	200,000
		雑費	**180,000**
		小計	**2,780,000**
		予備費	**551,000**
合計	**3,331,000**	**合計**	**3,331,000**

○63年度予算

- 前年度実績を参考にして、概ね前年並みに予算計上しました。
- 会費収入は 750名を予定しております。
  本年度はぜひこの目標を達成して、支部運営の財源を確保したいと思います。
  皆様の一段のご協力をよろしくお願いします。
- 大会出席者は、堅く見積って180名としました。できれば200名以上といきたいものです。

昭和62年度
白楊ヶ丘同窓会東京支部満10周年
記念大会盛大に行われる!!

昭和62年度の白楊ヶ丘同窓会東京支部大会は、「満10周年記念大会」として、11月21日（土）午後3時30分より、東京・千代田区平河町の「マツヤサロン」で、約一九〇名が参加して行われた。

今回の大会は、「伝統と友情、そして前進」をメインテーマに行われたが、昨今の函館が、母船式サケマス漁の廃止、青函トンネルの開通に伴う連絡船の廃止、函館ドックの衰退など、あまり明るい話題の聞かれない時、せめて週末の一時を、旧制・新制の世代を超えて、学校での思い出を語り合うと同時に、東京から函館への熱い思いを送ろうと言うことで参加を呼び掛けた。

さらに、63年3月に廃止される思い出の多い青函連絡船に哀悼の意を表して「去り行く青函連絡船を惜しむ」という特別企画も盛り込んだ。

大会は、開会宣言の後、58期の武田愛子さんの司会により、始めに池田支部長（45期）が「今回初めて週末の午後に開催し、女性や大先輩の方々の参加が多いように思う。東京支部結成後満10周年を経過したが、その間多くの方々の協力により組織体制も着々と整いつつある。今後とも一層の発展を期したい」と挨拶を行った後、来賓の古谷泉函館中部高等学校長が祝辞を述べた。また、函館市東京事務所長が「さようなら青函連絡船」と題して、函館と連絡船の歴史、連絡船にまつわるエピソードなどについて講演し、参会者に多くの感銘を与えた。

この後、同窓会歌（函館中学校校歌）を参加者全員で斉唱、大会の雰囲気が盛り上がったところで、水沢房子評議員（60期）の発声で、東京支部の一層の発展と参加者の健康を祈願して乾杯し、懇談に入った。

大会では、アトラクションとして、同窓有志の寄付による品物の抽選会が賑やかに行われ、会場は和やかな雰囲気に包まれた。

会の最後に、校歌（函館中部高等学校校歌）を全員で歌った後、山口ヒロ副支部長（55期）が閉会宣言を行って、午後6時過ぎ終了した。

菅原大作（65期）記

▲記念大会で挨拶する池田支部長

あちこちで親睦の和が広がって……▶

昭和63年度『第12回親睦大会』の日程決まる!!

恒例の親睦大会の季節となりました。

ことしは、第12回の大会を迎えて、一層交友と交流を深め、母校の発展と同窓同志の高揚に尽したいものです。本年は、とくに若い期の方に積極的にご参加いただき、新しい活力を求めたいと思います。

先輩、後輩という意識を持たず、どうぞお気軽にご出席ください。会場で懐しい顔に接し、楽しく語り合いましょう。

●と　き　昭和63年11月24日(木) 午後6時より

●ところ　「東京青山会館」

地下鉄表参道下車

●会　費　7,000円

☆なお、大会当日には、昨年のご好評にお応えして夢いっぱいの**「福引抽選会」**を行います。つきましては、会員の皆様に賞品ご提供のご協力をお願いいたします。

(連絡先)

〒162　新宿区市ヶ谷砂土原町1－2

(財) 東京都予防医学協会

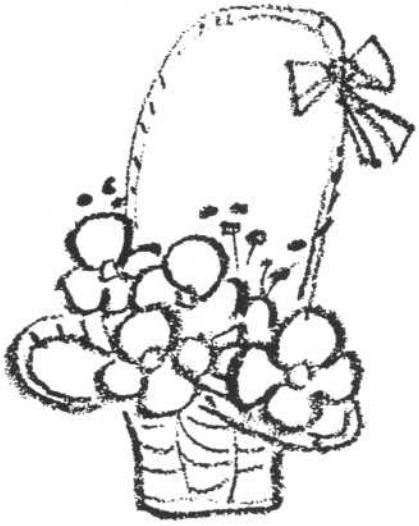
菅　原　大　作　　電話 03 (269) 2101 内228

会費納入のお願い

本会の貴重な財源である会費についてぜひとも皆様のご協力、ご支援をおねがいします。

63年度会費2,000円を同封の郵便局払込用紙をご利用の上、なるべくお早目にお払込みくださいますようお願いいたします。あなたの卒業期および年次のご記入をお忘れなく。

なお、通信欄へ皆様のおたよりをお待ちしております。次号の会報に掲載いたしたいと思います。



会員よりの投稿

「スポーツ万能時代」

伏見滋史（昭7年卒）

昭和三十九年の東京オリンピック終了後より日本のスポーツ界は、色んな面でどんどん活発になって来た。

戦前の日本ではプロ野球人であっても将来、それで生活して行けると云う保証がなかったのである。ところが現今ではプロ野球だけでなく、サッカー、テニス、スキー等にもプロの選手が誕生して、立派に生きて行っている。

殊に夏の全国高校野球大会の人気は爆発的で、PL学園、常総学園等の野球学校みたいな高校も各地に出来、プロ野球選手の供給源みたいになっておるのである。

世の親達は自分の子供に、勉強〳〵と云うよりも運動神経がよく、スポーツの素質のある子とみたならば、思い切ってどん〳〵その方に力をそそぐべきであり、よいコーチを選んで（これがちょいとむずかしいが）そのコーチに預ければ、野球でしたら中学校～高校の六年間で立派な選手になれる筈である。

又スポーツは立派な体力をつくるばかりでなく、精神面においても、忍耐、努力、辛棒と強力な精神力を養成することも出来、社会人となっても、健康にも自信を持てる立派な人材となる訳である。手前みその様なスポーツ礼讃の一文であります。

尚小生今回旧制函館中学校～新制の中部高校初期（昭和二十二年）までの野球部史を作りました。

一部　参千円也（他に送料二五〇円）でお分け致します。

御希望の方は左記まで御連絡下さい。

練馬区石神井台3－18－22

伏見滋史　電話九九六－七〇七二

「毛がにといか刺しと」

成田安賢（昭11年卒）

毛がにがうまい季節になってきた。東京でも私はよく毛がにを食う。死んだおやじが酒好きで毛がにが好きだった。子どものころ、雪の降る夜よく買いにやらされた。家が電車（当時はまだ市電ではなかった）の亀田の終点近くだったから、大縄町（いま函館にこの町名があるかしら）の毛がに屋まで二キロの道のりがあった。毛がに屋の前にたした万年座（？）とかいう二本立ての映画館があった。雪がひどいので毛糸のぼうしに首巻きをしっかり絞めても初めは寒かった。歩いているうちにポッポッとからだがあつくなる。毛がに屋に着くと、大きな五右衛門ぶろみたいな釜（かま）にうじゃうじゃしているかにをどんどんぶち込む。もうもうたる湯気の中、うだったかにのとくに大きなやつをもらうのだ。一匹一円ぐらいだった。（昭和の初めのころの値段、いま東京で五千円）、生きたやつが瞬間かまうでになるので、びっくりしたかにが身一ぱいの味を出す。それでうまいのだ。とおやじはいっていた。

晩酌のさかなに、毛がにをポリポリ歯でかみながら、殻の山をこしらえた。時々、そばにいる私に、大きな太い足をポイとくれた。子ども心に、こんなうまいものがあるかと思った。それからというもの、七十歳の今日まで、私の毛がに好きは、いよいよ盛んになるばかりだ。（東京には残念ながらいい毛がにがない。新橋駅前に一軒いい魚屋がある。）

函館名物にいかそうめんというのがあるらしい。細く切ったいかの刺し身をどんぶりに入れて、そうめんのようにするというのだが、私はこの年まで食べたことはない。たまに函館に行くと、弟の嫁が必ずいか刺しを出してくれる。ほかのものはいらないから、いか刺しをとたのんであるのだ。朝浜に上がったばかりのベッコウ色のいかを細づくりにして長方形の刺し身皿に並べ、大根おろしで食べる。うまい、身の〝ひのって〟いるのだ。ひのるというのは、そり返るという意味の函館の方言だろうか、むかし、まだ海岸町、万代町の浜が埋め立てしていなかったころ（六十年ほど前か）早朝、浜によくいかを買いに行った。生きのいい大きなやつが、大漁の時はたしか十銭で三ばいぐらいくれた。朝めしのとき、すぐ刺し身にする。亡母が刺し身づくりが上手で、一切れ一切れが皿の上で〝ひのった〟。辛味の大根おろしがよく合い、子どもの舌にもうまく感じたものだ。東京にきて五十数年、残念ながら〝ひのる〟いか刺しにお目にかかったことはない。

（元共同通信社専務取締役
元足立学園高校長）

「商社マンへの応援歌」に寄せて

井上　勲（昭13年卒）

日本には資源が乏しく、その為にはどうしても、国民生活に必要なモノを輸入する為に、輸出を増加させなければならない。貿易立国が、国の大方針である。

こんな事を教わったのは、中学生の頃の事だと思う。今でも、日本に資源が乏しい事は、事実である。然し、余りにも輸出に力を入れすぎて、相手国との間に、貿易不均衡が増大すれば、当然相手国の不評を買うのは、あたり前の事であろう。

現在の日本の国際的立場は、甚だ悪い。日本の製品輸出にばかり努力を重ねて来たツケが回って来たとでも言うべきであろうか、今こそ、貿易立国は、相互の国の発展と、お互いの立場の理解の上に、相身互い身でとでも言うべき基本的な立場に立ち返る必要があるのではなかろうか？

貿易に若干かかわって来た立場から、大変漠然としたものではあるが、こんな事を考えて、友人等と貿易の話しが出ると、私の持論の様にして居た私だが、先日、函中同期の畏友、外山源一郎君から、

「実は今度、三菱商事の仲間と一諸に、「商社マンへの広援歌（バトルヒム）」と言う、些かおこがましい名前の本を出版し、小生も中学生の作文並みの一篇を出稿していますので、貴兄に一冊謹呈します。ご笑覧下さい。」と、大変丁寧な、そして極めて謙虚な手紙と共に、表題の本が送られて来た。

日本の輸出の夜明けの時代に、世界のあちこちで、仕事の開拓に苦労したナニの物語りが、ここに集められて居る。

「仕事が楽しかった頃」との副題がついてはいるが、今振り返ってみれば、と言う事であろう。唯単に、自慢話や懐古趣味ではなく、未知のものに挑戦し、工夫しながら、不可能と思われたものに、僅かの可能性にかけて、種々の創意と工夫をめぐらして、不可能を可能にして行った話等、然し、成功した話、のみではなく、必死の努力にもかかわらず、失敗した話、大きな政治の壁にはばまれて、涙をのんだ話等、楽しく、一気に読了させてもらった。清々しい感動と、世界規模で大きな仕事にかかわって居た彼等に対する、若干のうらやましさの、感情と共に。そして、人間の営みがある限り、常に創意と工夫をこらして、未知なるもの、不可能と思われるものに挑戦して行く姿勢は、何時の時代にも、変らないであろうと、思い乍ら。

尚この本は、徳間書店から刊行され、丸善と冨山房にしか置いてないと言うことを付記して置く。

「話し上手になるには」

相馬　正樹（昭13年卒）

「あなたは先生だからお話しが上手でしょう」とよく言われる。ところが話しをし馴れているから上手とは限らない。話しの内容が決まっていて、しかも、学生と言う同じ年齢の階層を相手にしている先生の場合は、話しが上手であるに越した事はないが、内容を理解させるために話しをするのであるから、話術はあまり必要ではない。それどころか、あまり立て板に水のような講義は、そのリズムに乗せられてかえって内容がおろそかになる虞れがある。と言うのが私の話し下手の言い訳である。

本当に話し下手を実感させられるのは、結婚式や祝賀パーティの時である。不特定多数はもっとも苦手とするところで、自分で何を言っているのか分からないときが多いのに驚く。ところが、その後たまたま「学生時代に勉強した人に話しの上手な人は少ない」ということを知ってから、下手な話しをした後もあまり気にしないようになった。

それでは、話し上手とはどういう人かと言うことを考えてみよう。学校の優等生は、記憶が得意であるから予め用意した話の筋書きをなぞる事になるから、どうしても聞き手を引き摺り込む迫力に欠ける。これに比べて記憶に自信がない人は、その場に臨んでから発想するしかないから、初めは聞くに耐えないものであっても、回を追うに従って聞かせる話しができるようになると言うことである。

それにもう一つ、私は以前にこんな経験をしたことがある。それは、ある放送局の開局記念式典で社長が長い挨拶をした。この挨拶が素晴らしかったと言うので、これをパンフレットにして関係方面に配布することになった。早速録音したテープを聞いてみると、同じような話しの繰返しが多いことに驚いた。余計なものをカットして編集したら、一時間に及ぶ大演説がほんの五分間のテープに纏まってしまった。数百人の聴衆を唸らせた素晴らしい演説も中味はこんなものである。

この事から、不特定多数を対象とする話つまり演説は、内容で聞かせるものではなくて、リズムで聞かせるもの

であるということが分かる。要するに歌を聞かせる歌手の要領でリズミカルに大声をあげて喋れば、喝采を博すもので、決して中味で聞かせようなどと考えてはいけないのである。

この様なことを考えると、いつも中学時代の弁論大会を思い出す。今でもあの時の一節を覚えている。

「諸君、見よ滔々として流れる黒潮の姿を。しかして聞け、時には狂乱怒濤を巻き起こす偉大なる母、黒潮の響きを。これこそ、内孝道を全うし、外勤皇の大義を叫ぶ、頼山陽先生の熱血そのものでなくして何でありましょう」

何を言っているのかはよく分からないが、これを聞いて満場が拍手喝采をしたものだった。この文句を声をあげて読んでみれば、まことに良く韻をふんだリズムカルな文章になっているのが分かる。やはり、演説は歌でありリズムである。

「評議員お引受けの弁」

井筒吉彦（昭16年卒）

四十三回生の評議員として、笹島正秋君の後をお引受けしました。いままで白楊ヶ丘同窓会の会合に欠席ばかりでしたので、評議員をつとめるのは気が引けるのですが、厚かましくもお受けしました。

東京地区に四十三回生は多数住んでいますので、会合におおぜい出席するよう、そして沢山会費を納めてくれるよう努力したいと思います。よろしくお願いします。

「徒然草」

鎌田幸慈（昭16年卒）

昭和十一年、二・二六事件の日は函中入学をめざし試験勉強中であった。それから五二年を経た今日、激動の半世紀を回想して感無量である。

函中時代は恵まれた勉学環境で大いに勉強したものである。しかし高等学校に入学した年に大東亜戦争が始まり勤労奉仕で稲刈りなどに駆り出され、繰り上げ卒業のため、十分な授業を受けられないで大学に入った。ここでも短縮授業や勤労動員で勉学が儘ならず、さらに空襲で下宿を焼けだされ着のみ着のままで汽車に乗り青森の親元に辿りつく羽目となり、校舎も焼けて休校となった。そのうち終戦を迎え半年ぶりに授業再開となったが、インフレに住宅難、食糧難の時代で進駐軍でのアルバイトで稼いだり炭や芋の買い出しに時間をとられ勉強が疎かになった。このように満足な教育を受けたのは函中時代だけである。

大学を卒業して四つの企業に勤め、現在、夜間の工業短期大学で機械工学を教えている。学生は昼間働いている勤労学生であり六十歳代の人もいて昼間の大学と違う雰囲気がある。

教育改革の論議が賑かな昨今、私は函中時代に愛読した「徒然草」を思いだした。（ある僧侶志願者が乗馬や弓なども必要と考えあれもこれもと練習しているうちに年を取ってしまい大した人にならなかったという話）私は、あれも、これも必要だから教えるという教育のやり方には反対である。修士課程、博士課程と修業年限が長くなることが良い事とは思えない。我国は今まで欧米から学ぶことが多く、何でも真似をすれば済んだ。しかし、これからは真似するものが無くなるのだから「くれない族」教えて（くれない）から出来ないと言ってやらない人が多くなったり、教わったことしか出来ない人ばかりになっては一大事である。これからは独創力や感性が要求される時代になるから、詰め込み教育を止めて若いうちに実社会に出て色々と経験すべきである。中年になって夜間の短大などで学び生涯勉強するべきである。

「雪のトラピスト」

池田和行（昭18年卒）

修院と 信徒十戸や 雪の原

雪霏々と 塔の十字架 隠しがち

手袋を 脱ぎ句碑の雪 払ひけり

開きある 聖書に窓の 雪明り

聖堂に 掛時計なし クリスマス

（阿波野青畝主宰かつらぎ同人）

「それなりの顔になって」

冨尾（旧姓東）泰子（昭42年卒）

「あの大人のムード女性は誰？」と、皆にささやかれる中、ナイスミディらしく優雅に……。卒業後二一年目にして初めて出席する東京での同期会。そんなシーンをイメージしながら会場に到着した私でしたが、受け付けを入った途端、「あらーっ元気？」「懐かしいネ」「どうしてる？」「ちっとも変わってないネ」「すぐあなたと分かったわ」という声に迎えられ何とも複雑な心境でした。しかも、そう言って私を迎えて下さった皆さんナイスミドル・ミディばかりで、私の方が「えーとこの人は？」と戸惑うばかり。あの頃の瑞々しさを保ちながらも、その後の二一年間の生き様をしっかりと感じさせてくれた皆の顔はとても素敵でした。

私自身、中部高校で青春時代を過ごし、その後、すべての面で余りにも日本的すぎるこの岐阜の地に住んで一五年。岐阜弁が無意識に口に出てくる様になると共に、心もこの町に同化したつもりではいても、時々フッと疲れを感じ、あの函館の町へ帰りたい、故郷の家族や友人達に会いたいと思う事もあります。

東京での同期会で会える人達はきっと、私と同じ様な心の旅路をたどってきた仲間。何も説明しなくとも、何も言わずともお互いに心が通じ合う仲間――とは言うものの、二月一三日当日集まった五〇人。何とまあよくもしゃべりまくった事！午後三時に始まり、途中〝遠路はるばる〟組が別れを惜しみつつ抜けながらも、二次会、三次会、カラオケも入り、最後には同級の梶谷くんの御好意で彼のパブへ、と延々真夜中まで、私に至っては、その後又、会場のホテルへ戻り、夜明け近くまで親友と余韻を楽しみました。

四日間もの長期休暇を許してくれた夫と、中一の娘、小四の息子（この息子、恩師豊岡先生のお名前を頂いて〝亮〟と申します。）のおかげで、学生時代を過ごした中野の町や学校へも行ってみました。懐かしい道、懐かしい町並でしたが、それがかえって過ぎてしまった歳月の長さを私に感じさせました。

でも、過ぎ去った思い出を大切にしながらも、今生きている現実の世界でしっかりと自分に責任を持って、今度皆と会う時には、私もそれなりの〝顔〟になっとらんといかんねと、帰りの新幹線の中で岐阜弁で考えました。

「修学旅行乗遅れ事件」

垣坂　清（昭51年卒）

ここ数年、函館に帰ってはいないが、こちらにいても、年に1～2回は函中時代の友人に会うことがある。お互いに近況報告をし、同級生の消息について情報の交換を行なう。そして、函中時代の思い出話に花が咲き、酒が進んで夜は更ける。何年か前に会って話した話題であっても、再び同じように話し込んでしまうのであるから不思議なものである。私にも、そういった必ず酒の肴になってしまうような思い出話がある。修学旅行での失敗談である。14年前の修学旅行は京都・奈良と東京というお決りのコースで、往路は函館を昼の12時過ぎの連絡船に乗り、青森から16時25分発（何故か発車時刻を正確に覚えている）北陸回り大阪行きのブルートレイン『日本海』に乗換えて京都には翌朝の七時頃に到着するというものであった。青森駅で連絡船を降り『日本海』に乗換え、荷物を決められた座席に降ろした私は、発車まで充分な時間のあることを確認したうえで（実際は5～6分しかなかった）、列車の中で飲むための清涼飲料水を求めて再びホームに出た。誰でも考えることは同じらしく、ホームの自動販売機の前には列ができていた。私の前に並んでいたラグビー部のN君は、クラスの女生徒から頼まれた分も買うんだということで100円玉を入れてはせっせと『ファンタ』のボタンを押していた。しばらくして、彼の様子がおかしいので、どうしたと聞くと釣銭（当時『ファンタ』の350㎖缶は90円であった）が出ないという。販売機の釣銭切れランプは点灯していないので故障したのかと思い、二人でガチャガチャと販売機をいじり始めた。太陽の光が釣銭切れランプに当っていたためにランプの点灯が見えにくくなっていることに気付き、「やっぱり釣銭切れだ」と結論が出たところで、ふと顔を上げると列車が動いている。はじめは、先発のこの列車はどこ行きの列車だろうと呑気に眺めていたが、次第に加速していく列車の窓にホームベースのような田中勉先生の顔が見えたとき、ようやく自分たちの置かれている情況が理解できた。「このま

ま函館に帰るべ」とN君。しかし、荷物は列車とともに京都に向かっているし、このまま「ただいまあ」と帰る訳にもいかないだろうということで、駅員に事情を話して京都まで行かせてもらえるよう依頼した。四時間程待たされた後、青森駅の助役が「乗り遅れ」の旨を書いた名刺を持たせてくれて、常磐線経由の急行『十和田』に乗ることができた。旅行バッグもなく、荷物は腕いっぱいに抱えた10本余りの『フアンタ』だけという奇妙な2人の旅行者は、事情を知らない回りの乗客には奇妙に見えたことであろう。堅い座席に腰掛け、乗り遅れの原因となった『フアンタ』を2人で飲み明かし、翌朝上野に到着。「名刺」を見せて東京から新幹線に乗り換えて一路京都へ。嵐山で合流したのは午後1時頃であった。当然ながらコッテリと脂を絞られ、2日間の外出禁止処分。友人達から「修学旅行乗遅れ事件」というタイトルまでつけられたこの失敗談は、その後の修学旅行の事前説明会の度に引合いに出されて、「ホームに出て買物をしないように」というお触れまで出たとのことである。1年半後、大阪の大学を受験した。その日のうちにダメだとわかるような出来だったにもかかわらず、落込んだ気分にならなかったのは、大阪までブルートレイン『日本海』に乗ってこれたという満足感があったからなのかも知れない。

第35期生(昭8年卒)の同期会

宮本武雄

今年は青函トンネルの開通と青函博の開催があるというので、私共の第35回卒の同期会は七月末に函館で行われることになり、道内からはもとより関西・関東からも参加して、三十数名(数人の方はご夫人同伴)が三十日正午函館駅前に集合した。お互いに久方振りに会って「やあやあ」と握手を交したり、また、あれは誰であったかなという光景もあった。

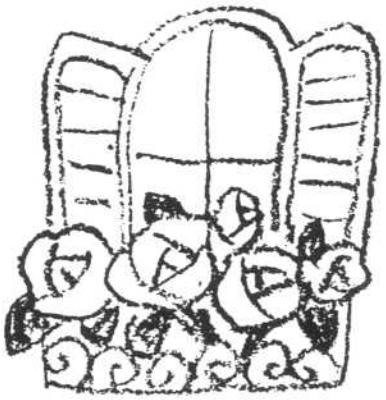
やがて現地幹事の旗振りで早速小型バスに乗り市内観光に出発した。コースは先づ立待岬をふりだしに八幡宮の前を通って、公園の裏通より元町公会堂へ出て弁天の外人墓地まで行ったのであるが、その頃函館山にかかっていた霧も晴れてきたので、最近取付けられたときく大型ゴンドラで山頂に登った。眺望は素晴しく、まだ下の方では多少の霧が太平洋の方から流れてきていたが、あの山、あの海、あの街、函館をふるさととする私共にとっては、子供の頃からそれぞれの思い出もあることであり、懐しい限りであった。ただ港に連絡船が見えなくなると思うと何となく淋しさを覚えた。

山を下りて再びバスの人となり、大門を経て啄木小公園を過ぎ、函中校舎付近を回り、産業道路へ出て大沼へ向かった。目標は鹿部へ出る道の途中(昔は留めの湯といっていた付近)に最近建った「ホテル白樺」であった。この辺りは函中時代にスキーの合宿に来たこともあったが、小学校五・六年の二回に亘り、夏休の鹿部海浜学校に行く途中疲れて小休止した所である。当時今は亡き松田一男君も一緒に歩いた仲であり、彼が早くからこのホテルを予約していたと幹事から聞いて、彼の懐しい所を訪ねようとした意図が伝わってくる様な気がして、白樺の緑も一入美しく感慨深いものがあった。

一同ホテルに落着き夕方宴席についたが、幹事の司会で先づ他界された方々のご冥福を祈って黙禱を捧げた。今日集った私共も早くも卒業五十五年であり、何れもシルバーで、今更乍ら『少年老い易く…』の実感を深くした。お互いに盃を交し、酔うほどに不思議なくらい昔の童顔というか若い頃の面影が浮び上ってくる。中には古い函館行進曲など唱う者もあり、宴は酣となり、和やかに旧交をあたためて、さらに五年後の卒業六十周年には再び函館で会おうという提案もあった。かくていつもの通り校歌と応援歌でしめくくりとなった。

翌朝は大沼湖畔で記念撮影をして観光船で島めぐりをし、いつも変らぬ美しい風景を満喫して函館駅へ戻り、楽しい一日を終えた。

今回病気などで参加できなかった方々には非常に残念であったが、これらの方々には一日も早くご恢復を祈ると共にお互いに今後共益々健康であることを祈念して散会となった。終りに現地の幹事として大変お骨折を頂いた伊藤・岸田君等に深謝して筆を擱きます。



よんまる会（第40期・昭13年卒）

卒業して丁度半世紀、五〇年に当たるので同期会も全国的に盛大にやろうと言う事になった。折りもよく、市が青函博を開催して華を添えてくれると言う御厚意に恵まれて、わが同期会は二日間に亘る豪華版となった。日程と会場は

九月八日　前夜祭　函館『入川』

九月九日　三沢『古牧グランドホテル』で、出席者総員四一名。

前夜祭を終えて、翌日は最後の連絡船に乗って昔を偲び酒を酌み交わして名残を惜しみました。

一人ずつでは気が付かないが、記念写真で纏めて見ると、それぞれの顔に五十年の歳月が彷彿と見えるのはあらそえない。

函館、東京、札幌と毎年回り持ちの全国大会は、明年は静岡県清水市で開催することを申し合わせて解散した。

幹事　相馬正樹・梅田良太郎
連絡　逗子市沼間五―七六五―二六二
電話　〇四六八―七三―八八四九

第46期（昭和19年卒）

渡辺保二

46期の同期会は毎年11月第3週の金曜日、銀座スキヤ橋のニュートーキョーで行っている。出席者は25名位、東京在住の担任の先生方はすべて鬼籍に入られたので、同期生だけの集いであるがこれまた格別で話題は豊富、①先生のあだ名を初め、なぐられた話、②教練の時間には柏野練兵場で菊地配属将校（ウマ）にしごかれた話、③亀田八幡宮から大野新道を通って峠下経由で出発点まで戻る強行遠足の話、④函商、函工との合同野外演習で雨中七飯より横津岳を横断軍川に到着、軍川小学校に一泊し、翌朝大沼より峠下に出て五稜郭より駆け足にて校庭着、到着と同時に分列行進をした話、⑤万代埠頭で貨車の石炭積み下ろしやハシケから倉庫まで、倉庫からハシケまで、30kg重さの缶詰を背子をつけて運んだ勤労奉仕の話など我々戦中派にとっては苦い想い出が多い。

変ったところでは函中のそばにある遺愛女学校の男子禁制の構内にラグビーの練習中わざとボールを入れそれを取りに行った猛者、今もって当時の女学生の名前を数え上げる記憶力の良い者など我が46期の中にいるのは頼もしい限りである。

そしてそろそろ話題が尽きた頃函中校歌を放吟し散会となる。

来年は卒業45周年記念全国大会が大沼の近く鹿部温泉で盛大に行われるのを今から楽しみにしている。

29年卒業35周年記念同期会（関東ブロック）を64年に楽しく開催しましょう!!

黒川陸郎

本年も例年にならい6月18日第17回同期会を東京南平台会館にて開催しました。（出席者34名、年度幹事、小林利夫君、弦木健君、木村幸子さん）二次会も幹事の常連の店にほぼ全員集まり遅くまで親交を深め意義深い会となりました。

来年は卒業35年目を迎えますので特別な企画のもとに30周年（出席者71名）にもまして賑々しく開催する予定になっております。

開催目標を6月頃として本年中に記念会準備世話人を設け企画立案してまいります。これをもとに来年2月頃までに多くの有志の方々に集まって頂き最終決定したいと思います。

記念会に対する意見を多くの方々より拝聴したいと思いますので連絡を待っております。今後通信連絡が円滑に出来るためにも住所、勤務先、電話の変更がありましたら早めに黒川までお知らせ下さい。

連絡先　自宅　九五一―六四七〇
事務所　四四七―四〇三〇

第57期（昭30年卒）

吉田精吾

一年以上も前から「青函博で会おう」を合い言葉に、地元函館の幹事諸氏が綿密なプラニングを進め、漸く実現したのは、8月20日（土）のことでした。

場所も、温泉があって、畳の上でゆっくりくつろぐことができて、そして会費はなるべく安くと、随分虫のいい話にもかかわらず、JR出身の高桑幹事のはからいで、これにピッタリの「湯の川荘」で賑々しく、夜の更けるのも忘れて海の幸、山の幸を心ゆくまで味わいました。

出席者も遠く加古川（兵庫県）からかけつけて下さった岡田（旧姓皆川）先生をはじめ、総勢95名、今や熟年まっ盛りのおじさん、おばさんばかりでしたが、気持は10代の青春そのものでした。

2次会はクラス別に一部屋ごとに車座になって、トウモロコシや枝豆をつまみながら昔話をはじめ仕事や趣味、子供のことなど思い出にふけりました。

翌日は、ゴルフ組と青函博見学組に分かれ、ふるさとの真夏を思う存分満喫しました。

一日一日、一年一年が大事な年になってきましたが、この次はまたオリンピックに合わせてか、あるいは55才になったらか、いずれにしても次回を楽しみに、そして元気に再会することを約束して散会したのでした。

❀ ❀ ❀ ❀ ❀ ❀

函中三八会（昭38年卒）

菅原大作

本年の「函中三八会」（昭和38年卒業・第65期・同期会）は、七月九日（土）午後六時より、東京・新宿のワシントンホテル内の「三十三間堂」で行われた。

同期会は、ここ数年、年一回に開催することを目処に実施して来ているが、幹事の一方的な都合により開催時期が一定せず、会の皆に迷惑をかけている。また、今回は、土曜日の夜ということで、参加者が何人来るか心配されたが、全部で26人（男15人、女11人）が出席、最近の会合では最も多い出席者数であった。

この日の会では、卒業後25年も経過していることから、最初に参加者の自己紹介と近況報告、さらに記念写真の撮影、懇談を行い、大変和やかなうちに終始し、次回の再会を約束して午後九時過ぎ閉会した。

ただ、こうした同期会や同窓会の幹事を担当していて大変残念に思っていることは、会の案内状を送っても、出席していただけないのはもちろん欠席通知もいただけない方が多いということである。今回の同期会も案内状を差し上げたのは108通だが、そのうち出席者が25、欠席通知27通、転居先不明での戻りが3通、合計55通、回収率は51%であった。今回に限らず、案内を往復葉書で出しているにもかかわらず、二人のうち一人は回答していただけないのが実情である。

幹事として今後ともお願いしたいことは、同期会や同窓会に出席していただければ嬉しいけれど、出席が無理であれば欠席の通知をお早めにいただきたいこと、さらに欠席の通知に一言、二言近況をお知らせいただきたいことである。

今後とも何卒よろしくお願いいたします。

わが心の青春、開花す

菊地有人（昭42年卒）

20年—光陰矢の如し—同期諸氏の再会、昭和62年8月15日。

少々太っ腹であったり、チョッピリ風体は変っていても、心は母校函中の中庭にありました。そっと横顔しか見ることができなかったあの娘をも、今は隣に座って語れる舞台は中庭の芝生でした。貴男とケンカしたことも、あの先生に説教された事も全て忘れ、ひたすらわが心は青春、心がはずむ。楽しさいっぱい。カミュもサルトルも浮ばない。浮ぶのは♪♪バラが咲いた、バラが咲いた…♬この広い野原いっぱい…♪♪そして、文化祭にフォークダンス、函館山登山に赤川ハイク……。私達の青春が再び花開いたのでした。遠くは鹿児島、本州から、ようこそ函中へ。80名を超す仲間が集ったのです。

広川先生の化学でこってり絞われ、加藤先生の「生活の中の物理学」を学び、山本先生の「西鶴」説法で純文学（？）の楽しさを再認識。模擬授業では、授業の大切さと苦しさを再知することができました。梅田先生のスピーチで「9組」の真の姿を知らされ笑い、古谷学校長（地学）から同期会発展の激励を受けました。

函館の黄昏を40名がビール片手に市電に乗車、遊覧しました。頬まで夕焼けでした。二次会も70名を超す大盛況……。三次・四次会へと全力投入——若さいっぱい。

まだ、ひよわな69期同期会ではありますが、この祝賀会でひとまわり大きく成長できたと思うのです。ラストイベント、腹から歌った〝函中校歌〟の迫力と、築いた80名の大きな輪が、その証しと言えたのではないでしょうか。

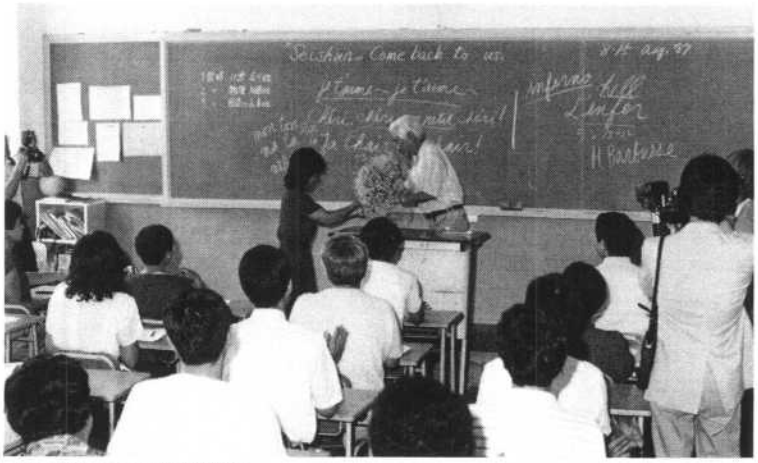
（この席上で、69期会は、函中校歌の初句から頂き「**火ばしら会**」と命名されました。）

◇◇◇　◇◇◇　◇◇◇

昨年の20周年記念行事のひとつとして、その年の10月に発行された〝卒後20年の集い〟という記念誌に掲載した実行委員長のことばをそのまま紹介しました。

「函館の同期会には、昨年のこの大イベントが初参加でした。それが、あとをひいて今年も又、帰ってしまいました。「今年は会場を準備するだけ」との事でしたが、それが逆に効果をもたらしたのか、集った50名余りが、好き勝手に歩き回ったり、しゃべりまくったり、初対面で意気投合したり…で、それはそれはリラックスしたとても楽しい会でした。」

梅田（旧姓上野）やよい（昭42年卒）



▲母校にて模擬授業
3時間目・山本先生の国語（？）

市電を貸切り▶
市内周遊

会員短信

昨年の会費振込用紙の通信欄から抜粋したものです。

老来、出不精になりつつあります。（大15卒**島原健一**）まだ80才といいたいのですが、もう八十才になります。無理がききません。（大15卒**細川輝彦**）いろいろお世話様でございます。（大15卒**佐瀬順夫**）昭和60年秋から毎日が日曜日となりました。体調もまずまず、老人会の仕事を手伝っています。心身の老化現象は蔽うべくもありませんが、海外旅行に出かけたりして子供達を心配させています。猫との対話が上手になりました。（昭7卒**大原孫七**）国学院大学常務理事を3期任期満了で退任しました。満73才まで現役在任を感謝しています。（昭7卒**三上茂**）糖尿が再発引続き加療中です。（昭8卒**浜田榛名**）私は3年2学期より札幌一中より転校し、函館大火で罹災直後、父の転勤により4年2学期で転校、韓国の京城童山公立中学を卒業した者です。（昭11卒**神子田康彦**）62年10月4日前日の五十周年同窓会をした39会出席者39名は、市内ツアーで変った函館を見て回りました。母校剣道場を見ましたが〝白楊魂〟の額は意外と小さく見えました。ポプラの1本だにないポプラヶ丘の校舎は、中部高校と変って（私たちはもっと！）おりました。（昭12卒**河村泰平**）都塵を離れた美しい自然環境のなかで、毎日妻と2人だけで自由時間100％の気ままな生活をしています。（昭13卒**林正純**）歌誌アララギ同人として短歌を続けて47年。NHK学園の生涯学習短歌講師をしています。来年は第三歌集を出す予定です。（昭14卒**佐々木忠郎**）6月に家内と一緒にヘルシンキ、レニングラード、ストックホルムなど北欧3カ国を回り、白夜の北極圏の旅をしてきました。（昭16卒**大森志郎**）東洋大学工学部勤務。11月25日または26日イイノホール新しい日本の歌発表会参加予定「天使の輪なげ、平井丈一郎作曲」（昭17卒**浦田常治**）61年3月末に日本海事検定協会を停年退職、目下毎日閑居しております。（昭17卒**高倉隆**）気象庁を定年退職、目下年金生活をしています。（昭17卒**勝浦寛**）甘いものの嫌いな小生がアイスクリームの製造に従事するなんて皮肉なもの。嫌いなだけに品質に厳しいかも。（昭18卒**村上国男**）62年6月末で日動火災を定年退職いたしました。（昭23・24卒**長尾享司**）62年8月末に（財）日本冷凍食品検査協会を退職しました。（昭23・24卒**工藤亮二**）宮古地区にも函中会があります。（昭23 24卒**山田吾市**）11月26日～12月2日池袋東武美術サロンにて第3回「池田正文油絵個展」開催予定（昭26卒**池田正文**）函館出身の従姉と2人で、今夏青函連絡船に敬意を表する旅をし、何十年ぶりの函館を訪ね、懐しい友にも逢って参りました。ハリストス教会、聖公会のあたりの様子が変わり（西校も）多少見知らぬ町を訪れた感もありました。（昭26卒**加藤久枝**）なかなか帰郷できずにいます。来春初孫が出来るのが何よりの楽しみです。（昭27卒**鈴木良子**）私も56期生に入れてもらい大変嬉しいです。よろしくお願いいたします。（昭29卒**大西賢司**）支部便りによれば、会費の納入状況が悪いとのこと。白楊ヶ丘を出たものとして、いまどき年2千円が払えないとは不思議に思います。（昭30卒**信太延一**）昨年独立して新橋に特許事務所を設立しました。〝アスカ国際特許事務所〟（昭32卒**山崎友宏**）健康だけは快調に維持しております。同窓会誌楽しく読ませていただき、懐しく思いました。（昭33卒**所明彦**）函館を離れて二十数年経過しました。妻と一男一女の4人家族で、ほどほどに平和な生活が送れています。六年前より宇都宮大学教育学部附属中学校に勤務しておりますが、片道四七kmの自動車通勤は最近身にこたえるようになりました。函中出身を支えとしてがんばっております。（昭34卒**稲垣正也**）東京の63期会も年1回の集まりを続けて今年は第5回となりました。会報1号も出しました。（昭36卒**小林嘉則**）東京白楊だよりを懐しく拝見いたしました。日頃の幹事のご苦労に感謝いたしております。（昭38卒**栗原訓子**）相変らず韓国暮し、88年夏頃には完工予定です。情況次第では、ペルシャ湾へ出張予定です。（昭38卒**木川義景**）

編集後記

◆前回の会報は記念特集号として、ページ数も大幅に増やしましたが、今回は通常ベースに戻しました。でも中味の方は、年々充実していくよう努めたいと思います。今後ともよろしくお願いします。

母校も西歴もあと10年そこそこで新世紀を迎えますが、この会報も若い世代に受け継がれていくようにしたいものです。（Y）

◆第十一号をお届けいたします。今号は寄稿が非常に順調、ご協力ありがとうございました。向寒の折、お身体を大切に！（K）

発行・白楊ヶ丘同窓会東京支部
編集・吉田精吾、北原耕太郎
支部事務局・〒160 東京都新宿区坂町18
小畑文雄方
電話・（351）2012